

愛知サークル4月例会報告

2021年4月25日(日) 桜花学園大学 参加：10名

0 全員ミーティング

- ・「春の学び合う会」の反省
- ・今年度のサークル運営の仕方について
- ・年間計画の修正と組織作りについて

I 文学教材の追求

年度当初の学級づくりの映像を持参して検討した。

1 「やくそく」(5・6年)「あたしのア」(全校)

- ・教師は教材解釈をすでにしているが、子どもは初めて出会う教材である。もっと丁寧に授業を進めたい。そして、子どもの発言を見逃さないことが求められる。自由発言のリスクとか学習規律などの言葉が飛び交っていたが、内容が全てである。教師が用意した選択肢ではなく、子どもの発言を生かしてそこから問題をつくった方が、子どもは友達の発言を聴く必要が出て聴くようになり、全員参加の授業にしていくことができる。挙手や起立の有無などのような形式的なことは価値観の違いによるものなので、ここでは内容について検討したい。

2 「あいうえおのうた」(1年)記録・映像

- ・丁寧にやっているが、どこかで緊張感をもたせた方がよい。「朝、起きたときうとうとすると、言ったけどどう?」と、子どもの発言を使って、全員に聞くなど、動きが止まる瞬間が欲しい。動作化は見ている側がどう判断するか、というものである。(参加者一人が、「爆睡」と「うとうと」の動作化を試みる。それを周りが判断をする。)
- ・動作化させてみればいい。「うとうと」って、やってみて。こっちがちゃんと持っていれば、そこから向かっていける。辞書で調べたかもしれないが、自分の中に根付いていないから、今言えない。
- ・ほめ方が具体的でよい。声のトーンも素晴らしい。子どもの声が一発で出せるようにもっとのせていくとよい。

3 「あひるのあくび」(3年)

- ・口形を意識させてよい発話ができるようにさせたいと教師が願ってやっていることだが、ほめ方が事務的で、やっている子どもに意味が分かっているか疑問。これをやるとこんなに発話がよくなるという自覚をもたせて、楽しくやらせたい。
- ・目的をはっきりさせる必要がある。口形か発音か。母音法や劇団四季の発声トレーニング方法など、効果的なものがある。

4 「春のうた」(3年)記録・映像

- ・教師が分かっていることを分かり切っていて、それに子どもがつきあっている。教師が決めた解釈の道1本しかない。教師は子どもが発言しないと言っているが、いろんなことをもっとやらなければ、子どもは考えるようにならない。
- ・大雑把である。子どもの発言をくくってしまっている。それによって、抜け落ちたものがキラキラと輝いている。
- ・教師は演出家でもある。淡々と進めるのではなく、緊張感が欲しい。動作化とタイアップしてやるといいのではないか。

5 「こわれた千の楽器」(4年)

- ・子どもには、要求するだけではいけない。要求したら、必ず評価してやる。それを、子どもをよく見て丁寧に、徹底してやっていくとよい。

- ・発言することをノートに書いていると、ノートに書いてからでないと発言できないようになってしまう。早いうちにその習慣を取り上げる必要がある。

Ⅱ「表現教材」の追求

【体育】

「大きな前回り」（3年）

- ・演技に入ったところで映像を停止させて、観点を確認した。立ち位置、手を着く位置、指先の形、姿勢など教師がどこに着眼すればよいかを確認できた。
- ・手を着いたらすぐに頭を入れるやり方は宮坂流。この方が、腹筋と背筋で我慢する必要があるので負荷が大きい運動と言える。
- ・柔軟運動を毎日、どこかで時間をつくって全員がやれるとよい。

【図工】

「レース編み」（3年）

- ・よく頑張っている子も多いが、集中力が途中で切れてしまっている子も散見される。3年生には難しいのか。この教材の開発者は習作としてやっている。もう少し用紙を小さくしてやるとよいかもかもしれない。

<まとめ>

授業でノートに書いてあることを音読発表させるのではなく、その場で考えたことを対話させていくためにはどうすればよいか。

その場で考えさせる訓練を四月からしていく。考えをもったか確認する。全員にどうなのかをいいか、ダメかを聴く。選択肢を出して、必ず選ばせるなどして、全員参加をいつもさせていくということが必要だと再確認した。

一人一人が個人の研究テーマをもって、1年間取り組んでいけるとよい。